

Table of Contents

1. 研究発表要旨
2. 講演・シンポジウム要旨

【研究発表要旨】

A室1

金子光晴の作品における「混血」モチーフの形成

——1927-1937年の上海関連作品をめぐって——

東京大学（院） 王紫輝

1920年代から30年代にかけて、欧米諸国の影響力のもとに租界が設置され、上海は帝国主義的利害の交錯を象徴する都市へと変貌した。この都市のもつ民族的・文化的・階級的な多層性は、多くの文学作品で表現され、例えば村松梢風の小説『魔都』（1924）が代表的な例である。本論が扱う金子光晴（1895-1975）も、1926年から1929年にかけて三度上海を訪れ、「半植民地」的状况にある上海での経験をもとに多くの作品を執筆した。なかでも、「黄浦江の唄」（1928）にて「混血」というモチーフが初めて登場する。

金子の作品における「混血」モチーフは、とりわけ南洋体験を扱った作品群において顕著に描かれており、これまでの研究でもそうした作品を中心に論じられてきた。先行研究では、金子が東南アジアでの放浪を通じて自らを「混血」の存在と重ね合わせていることから、「混血」は「自己表象」の問題へと回収される傾向があると指摘する。

しかし、「混血」モチーフの初期的な登場例である上海関連作品に対する検討は十分に行われてこなかった。金子の上海関連作品における「混血」モチーフの検討は、後の南洋作品群における展開を理解するうえでも決定的な意味を持つと考えられる。

本発表は、こうした研究の空白を補う試みである。「混血」モチーフを通じ、いかにして植民地的抑圧構造への「抵抗」や文化的越境の理想を詩的に表現したかを分析する。同時に、こうした「抵抗」の表現がしばしば女性との幻想的「同化」という手法に依拠していることも重要だと考える。

A室2

森三千代の「国違い」と「帰去来」

——南洋進出における日本帝国主義の「二面性」とその不可視化——

筑波大学（院） 謝亜平

森三千代（1901-1977）は夫の金子光晴と共に中国・南洋・西洋を遍歴し、戦時中に文化使節として仏印に派遣された。しかし、従来の研究は金子光晴に焦点を当てたものが多く、

森は常に従属的地位に置かれてきた。加えて、戦争責任に関して、森に対する評価は曖昧なままである。故に、発表者は森三千代に焦点を絞り、彼女の戦争に対する認識への再評価を試みる。

「国違い」(『新潮』、1941年8月号)と「帰去来」(初出不明)は『国違い』(日本文林社、1942年)に収められた二つの短編小説であるが、一つの物語を成している。この二つの作品は東南アジアでのゴム栽培を背景として、日本人女性園子とマレー人男性ガンボとの恋愛物語を描いている。先行研究は主に日本人女性園子の主体性や異人種恋愛物語という視点に着目し、現地人に積極的に寄り添う森三千代の姿勢を高く評価した。しかし、園子が日本を二度逃れた真因と、ガンボという人物に対する現地の日本人の複雑な感情——彼が善良でありながらも狡猾だという矛盾した視点——についての詳細な分析は手薄である。それ故に、本発表では、上記した二つの問題に焦点化し同時代の資料との照合を通じて、「国違い」と「帰去来」の背後に隠される日本帝国主義の膨張志向と西欧諸国による制約という二面性を考察し、森三千代の戦争協力の姿勢を解明していく。

B 室 1

ヴァレリー、モンポウ、ジャンケレヴィッチを繋ぐもの
静岡大学 安永愛

静謐にして澄明な音楽を紡いだカタルーニャの作曲家フェデリコ・モンポウ (Federico Mompou 1893-1987) は、ポール・ヴァレリー (Paul Valéry 1871-1945) の詩集『魅惑』(Charmes, 1922) から「いつわりの死女」« La Fausse morte »、「惑わすもの」« L'Insinuant »、「失われた葡萄酒」« Le Vin perdu »、「風の精」« Le Sylphe »、「歩み」« Les Pas »を選び、1973年に歌曲集『ポール・ヴァレリーの詩による5つの歌』(5 Melodías sobre poemas de Paul Valéry) を発表している。哲学者のウラディーミル・ジャンケレヴィッチ (Vladimir Jankélévitch 1903-1985) はモンポウに傾倒し、最晩年の音楽論『遙かなる現前—アルベニス、セヴラック、モンポウ』(La Présence lointaine: Albeniz, Séverac, Mompou, 1983) においてモンポウの音楽の魅力を語っている。

本発表では、モンポウが上記歌曲集を作曲するにあたってヴァレリーの詩篇から汲んだインスピレーションがいかなるものであったか、その楽曲の特質から明らかにするとともに、ジャンケレヴィッチのモンポウ論やモンポウとジャンケレヴィッチの往復書簡を辿ることで、互いの触発のありようを探る。言葉から音楽へ、あるいは音楽から言葉へと至るダイナミズムを分析し、それらの作業を通し、ヴァレリー、モンポウ、ジャンケレヴィッチの三者に共通する「沈黙」の捉え方や地中海的風光への感覚の拓けを明らかにする。

B 室 2

アニカ・トールとポール・オースターのユダヤ性表象をめぐって

——「子どもの視点」を中心に——

東京大学（院） 萩野聡子

本発表では、スウェーデン語作家アニカ・トール（Annika Thor, 1950-）による児童・ヤングアダルト向け小説「ステフィとネッリの物語」（Steffi och Nelli）四部作（1996～1999）の分析に際し、英語作家ポール・オースター（Paul Auster, 1947-2024）による長編小説『4321』（4321, 2017）の作中作「靴底の友」（Sole Mates）を参照し、両作品に共通する「子どもの視点」を切り口に、ユダヤ性表象の地域的特徴について検討を行う。トールとオースターはともに戦後生まれの同世代作家であり、ユダヤ系の出自を持つ。そのため、両者の作品中にはユダヤ性やホロコーストの記憶をめぐる記述がしばしば現れる。今回中心的に論じる「ステフィ」四部作は、ウィーン出身のユダヤ人姉妹の視点から戦中および終戦直後のスウェーデンを描いた小説であり、異なる宗教や習慣のなかで生活する姉妹のユダヤ性をめぐる懸念や葛藤が丁寧に描かれている。ユダヤ性および戦争描写の地域性を考察するべく、本発表ではアメリカを舞台とした寓話的作品「靴底の友」を一つの参照項とする。本作は、作家が自己を投影したと思しきユダヤ系アメリカ人少年が、友人の死を契機に書いた短編小説という設定の作中作である。二作品の検討を通し、子どもの視点という枠組みの設定に関係してユダヤ性表象が持ちうる特徴や、「ステフィ」四部作の特異性、ひいては地域・言語圏の差による表象の差異を探ってみたい。

C 室 1

江戸川乱歩とどんでん返しの美学

——「フレーム理論」による『何者』分析の試み——

筑波大学（院） 区婉翹

結末の意外性は探偵小説の特徴である。江戸川乱歩はこの点を強く意識して作品を構想しているが、彼の特徴として、単なる意外性だけでなく、読者の解釈や予想そのものを遡及的に組み換えさせる「どんでん返し」というプロットを用いている点が挙げられる。乱歩の発表作品のうち、どんでん返しを用いたものは三分の一を超えている。しかし当時、どんでん返しは技巧に偏り、乱用された仕掛けとされ、十分な評価を得られなかった。その価値を問うには別の視点が求められる。

乱歩が欧米探偵小説を学んでいることとも関わるが、どんでん返しとほぼ同義のプロットツイスト（plot twist）に関する小説研究は読者の読解行為や再読性などの観点から欧米で行われており、乱歩研究においても参照可能である。なかでもミラン・テルーネン（Milan

Terlunen ‘All Along…! The Pre-History of the Plot Twist in Nineteenth-Century Fiction’, 2022) は、「読前・読中・読後・反省と議論」という読書の四段階で情報提示を分析し、プロットツイストが豊かで長続きする独自の読書体験について論証している。とくに、作中の情報の隠蔽について、テルーネンはアーヴィング・ゴッフマン (Erving Goffman) の「フレーム理論」(“Frame”) を援用し、読者がプロットツイストによって欺かれる必然性がいかに構成されるかを分析している。

本発表はこうした先行論を参照しつつ、乱歩『何者』(1929) における情報提示の過程を分析し、どんでん返しが意外性にとどまらず、乱歩の芸術思想を体現する重要な技法であった可能性を探る。

C 室 2

国策と翻訳

——『大陸新報』における室伏クララの軌跡を手掛かりに——

筑波大学 (院) 蔡夢慧

『大陸新報』(1939-1945) は戦時中国の華中地域で、日本の陸海軍や外務省、そして興亜院の出資によって刊行された日本語新聞である。占領地上海における日本人を主な対象とする唯一の邦字新聞であり、その紙面には中国占領地の政治的・経済的実態に関する記事だけでなく、文化面の記事も多数掲載されていた。これまで『大陸新報』は国策新聞としては重視されてきたが、その文芸文化欄、特にそこに載せられた翻訳作品に関する先行研究は少ない。

室伏クララ (1918-1947) は 1940 年から 1947 年まで南京や上海に滞在しており、『大陸新報』における唯一の女性翻訳者であった。彼女は 1944 年 3 月から 6 月までの間に、汪兆銘政権の役人の随筆、蘆焚 (1910-1988) の小説「郵便やさん」(「郵差先生」『万象』1944 年新年号)、哲非 (生没年不詳) の評論「民族主義文学論」(「民族主義文学及其它」『雑誌』1944 年 3 月、4 回連載)、張愛玲 (1920-1995) の随筆「燼余録」(「燼余録」『天地』1944 年 2 月、7 回連載) を即時的に翻訳していた。本発表では、1944 年の『大陸新報』に載った翻訳作品を概観した上で、室伏の翻訳に先立って同紙で行われた座談会等日中文化人の議論を参照して室伏クララの立ち位置と翻訳活動の背景を解明する。また占領期上海の中国文学の動向と原作が掲載された各雑誌の性質を踏まえ、原作と訳文との比較を通して、室伏クララの翻訳と国策との関係性を検討する。

【講 演】

英語翻訳からふりかえる日本戦後詩

京都大学 吉田恭子

司会 明治大学 田口麻奈

アメリカの詩誌 *Poetry* の 1956 年 5 月号に日本特集として 24 名、49 篇の翻訳詩が掲載された。田中冬二の 7 篇を筆頭に、島崎藤村、萩原朔太郎から、戦争をまたいで活躍した詩人に加え、小暮克彦、谷川俊太郎といった戦後詩人も紹介されている。この日本特集号翻訳の経緯については 2 年前『ユリイカ』に序論的な考察を寄稿した。その後、シカゴ大学所蔵の *Poetry* アーカイブとアイオワ大学での調査を経て、新たに明らかになった情報を交えつつ、翻訳がキャンオン形成にどのような影響を与えるのか（あるいは与えないのか）について問題提起を試みたい。

Poetry では 1951 年からアジアの詩の特集が模索されたが、適切な翻訳者や協力者が見つからず難航した。日本特集号が可能となったのは、編集長の Karl Shapiro にアイオワ大学の Paul Engle がワークショップの詩人佐藤覚を紹介したことがきっかけだった。田村隆一と同じく 1923 年生まれ佐藤は、1949 年に新制東京大学文学部英文学科を卒業、1953 年から 55 年にかけてアイオワ大学大学院創作科で学んでいる。同じく院生だった詩人 Constance Urdang の協力を得て、百篇以上の近現代詩を特集号のために翻訳し提出した。その中から編集部が掲載する詩を選ぶにあたり、佐藤からは藤村と朔太郎および戦後の詩人はひとりも落とさずに掲載してほしいという念押しがあった。けれども実際には田村、木原孝一、北村太郎などが選から漏れている。

佐藤が選んだ 20 世紀の日本の詩人たちのラインナップには、『詩と詩論』と『荒地』の同人が少なからず含まれており、日本のモダニズム詩の成果を反映している。一方、同年に UNESCO Collection of Representative Works シリーズとして刊行された、Donald Keene 責任編集の *Modern Japanese Literature: An Anthology* では、440 ページ中 12 ページが 12 名の近現代詩人に割かれているが、ほぼ一貫して叙情的伝統をカバーしており、その後の日本現代詩“キャンオン”の青写真のような顔ぶれとなっている。

Poetry の場合も *Modern Japanese Literature* の場合も、内外からの「日本現代詩のあるべき姿」に対する視線が絡み合っている。前者では日本近現代詩の文脈を念頭に置かない編集部の評価が影を落とす一方で、後者では誰に／何に近代国民文学を“represent”させるべきかという強い意識が働いているといえるだろう。

【シンポジウム】

日本戦後詩とアメリカ——翻訳・抵抗・文化規範

司会・講師 明治大学 田口麻奈

講師 東京大学 逆井聡人

講師 鹿児島短期大学 竹本寛秋

これまで長い間、日本の現代詩批評の上では、「戦後詩」は鮎川信夫や田村隆一ら「荒地」グループの代名詞のように考えられてきた。そこには、「戦後詩」とは、単に戦後の一時期に書かれた詩というだけではない、二度の世界大戦を経て初めて書かれ得た思想詩群であるという一定の共通理解があった。この共通理解が明瞭であった時期には、「荒地」グループが顕著に示していた先端的な海外文学（T.S.エリオットなど主として英米文学）の受容や影響関係、またそれに由来する文明批評的傾向について、比較文学的な関心が大きく働いていたのだが、そうした文脈も時とともに変質を被り、「荒地」の詩とは戦中派の情念をうたった抒情詩であるという見方もまた一定のコンセンサスを形成するようになった。残念ながらこの間、比較文学比較文化の見地からする議論が全面的に展開されてきたとは言い難い。

学界全体における戦後詩研究は、そうした捻れを捻れのままに、ここ 20 年ほど、全体として資料研究に拠って「荒地」を脱中心化する方向で進められてきたと言ってよい。主として 1950 年代の左翼文化運動の気運の中から生まれた多くの同人詩誌が発掘・復刻されることで、「荒地」グループが代表し得ない、戦後の多様な詩的営為に光が当てられるようになった。日本の「戦後詩」の輪郭は現在、「荒地」グループのそれも含めて、多重的に描き直されている最中であると言えよう。

ただし、1920 年代後半から始まり今日に至る「現代詩」の歴史の中で、「戦後詩」が特権的に区分されてきた経緯は、「荒地」グループが主導した戦争責任論およびそれに付随する近代日本の問い直しと無関係ではあり得ない。視野の広い学術研究として、戦後に書かれた多様な詩の再評価を進めてゆくと同時に、近代全体を貫くような息の長い思想的課題を負った「戦後詩」の可能性の中心を抽出してゆく構えもまた必要であろう。

そこで本シンポジウムでは、戦後日本ないしは近代日本を貫く古くて新しい課題——「アメリカ」という課題を共通の軸としたうえで、「荒地」を含めた戦後詩群がいかにこれと向き合い、あるいはすれ違ったのかを議論したい。戦後最大の政治的他者として緊張関係にあり、新世界としてかねて共感の対象であり、大衆文化の面では憧憬の的であった、この多面体としての「アメリカ」の像は、小説を中心とする戦後文学研究においては既に様々な仕方で問われてきたが、戦後詩の領域においてははまだ豊富な蓄積があるとは言えない。詩的言語において「アメリカ」を捉えることとは、戦後詩人たちにとって具体的にどのような試みであったのか。そのよすがが他ならぬ詩であることに重きを置きつつ、日本戦後詩における「アメリカ」の像を追いたい。

戦後詩の中のトマス・ウルフ

明治大学 田口麻奈

吉本隆明をめぐっての緻密な資料整備で知られる詩人の川上春雄が、「長詩・アメリカ」で詩学詩人賞を受賞したのは 1954 年のことである。同賞の詮衡委員であった鮎川信夫は、トマス・ウルフの小説の翻案である同作を高く評価するとともに、自身もウルフのモチーフである〈父〉への希求と〈アメリカ〉の再発見という主題を受け止め直し、詩と詩論双方でそれを展開しようとした形跡がある。もともと、代表詩篇「アメリカ」（1947～1965、断続的に改稿）で、新世界・アメリカへの夢を撞着的かつ反語的に表現してきた鮎川であるが、その継続的な課題に、トマス・ウルフの小説はどのように乗り入れたのだろうか。また、そのように鮎川に多大なインパクトを与えた川上の詩作（当時極めて多作だった）についても、日本におけるウルフ受容の一端として、また戦後の思想詩の展開の一端としてどのような可能性を包含していたのか、興味深い。本発表では、川上を経由した鮎川のウルフ受容を中心に、ウルフの〈アメリカ〉像と日本戦後詩の対話的關係を照射することを目指す。

「戦後」詩のなかの山之口獏

——「沖縄よどこへ行く」と叙事詩という形式——

東京大学 逆井聡人

山之口獏（1903 年～1963 年）は、1925 年に故郷沖縄を離れてからおよそ 34 年の間、故郷の地を踏まなかったいわば「在日沖縄人」の詩人でもある。日本本土が「戦後」を迎え、その地で生活する獏は戦後詩の磁場のなかで沖縄を眼差し、呼びかけるような詩を書いていく。その意味では、サンフランシスコ講和条約の直前に書かれた長詩「沖縄よどこへ行く」（『婦人倶楽部』1951 年 9 月）は、「戦後」という時代認識が抒情詩の詩人・山之口獏に書かせた叙事詩であった。しかし、「沖縄よどこへ行く」の執筆過程を草稿からたどってみると、むしろ米軍による継続占領下にある沖縄を描くことに対する獏の葛藤と限界が見えてくる。本発表では、50 年代の戦後詩壇の状況、特に叙事詩という形式へ向けられた時代的期待を踏まえながら、山之口獏の詩作の位置と書くことの困難について考察する。

日本における「ビート・ジェネレーション」と「アメリカ」

鹿児島短期大学 竹本寛秋

今回の発表においては、ビート運動に深く影響を受けた日本の詩人たちにとっての「アメリカ」の問題について検討していきたい。

アメリカのビート運動は、1950年代末から60年代にかけて日本に紹介され、諏訪優や白石かずこをはじめとした詩人たちに大きな影響を与えた。また、ナナオサカキや山尾三省など、いわゆる「ヒッピー・ムーブメント」を代表するグループ「部族」を結成し、コミュニケーション建設の実践を行うなど、ライフスタイルの変革にかかわる影響を受けた詩人たちも存在する。

これらの詩人たちにおいて、「アメリカ」は、各自の問題意識のあり方によって、ある変換を受けた形で表象されることになる。例えば、黒人や先住民へのまなざしは、どのような布置において彼らの意識に組み込まれるのか。そのありようを分析することは、もちろん彼らにとっての「日本」のありようも照射することになる。

日本比較文学会 東京支部

ニューズレター

150号

発行人：寺田寅彦

編集委員会（編集担当）

委員長：鈴木美穂

委員：岩下弘史 亀井伸治 越野剛 中垣恒太郎

廣瀬絵美

支部大会準備委員会

委員長：小松史生子

委員：井上健 加藤百合 佐々木悠介 佐藤宗子

庄子ひとみ 寺田寅彦 廣瀬絵美

宗形賢二 和田桂子

事務局

事務局長：庄子ひとみ

会計担当委員：土田久美子

委員：小泉泉 芳賀理彦 畑中健二 蒔田裕美

JCLA

日本比較文学会
東京支部事務局

〒270-1695

千葉県印西市平賀学園台 1-1

順天堂大学さくらキャンパス

庄子ひとみ研究室

E-mail:

comp.lit.tokyo@gmail.com